

岡山・津寺遺跡

- 1 所在地 岡山市津寺中屋
- 2 調査期間 一九八八年(昭63)九月～一九九〇年(平2)二月
- 3 発掘機関 岡山県古代吉備文化財センター
- 4 調査担当者 岡田 博
- 5 遺跡の種類 官衙跡・集落跡・墓・水田跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代前期～近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(岡山北部)

津寺遺跡は、岡山市の北西端の平野部に位置する。古高梁川の氾濫原である肥沃な谷底平野が形成され、随所に旧河道の痕跡を観察することができるところである。平野部の西寄りには、吉備高原に源をもつ現在の足守川が北から南に貫流する。津寺遺跡はこの足守川の東側に広範に展開し、現地表では海拔四・五m前後の水田景観を呈している。足守川を挟んだ遺跡の西側

には、小山塊から派生する低丘陵地帯が広がっている。

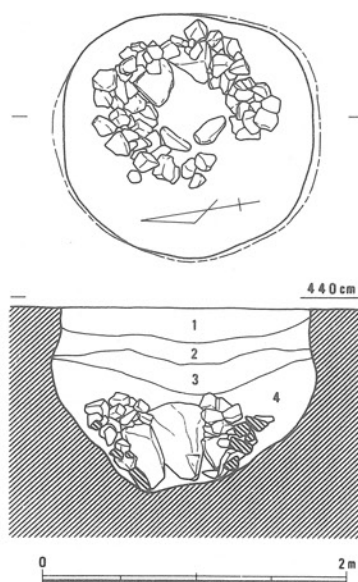
遺跡の周辺には、いわゆる「備中高松城の水攻め」の際に毛利方が陣を置いた城跡や、羽柴秀吉による水攻めの築堤の跡などが点在し、武将たちが対峙した往時の歴史的な景観が今なお残されている。

津寺遺跡がその存在を広く知られるようになったのは、山陽自動車道の建設に伴う発掘調査が開始されてからのことである。主に弥生時代から古墳時代にかけての大規模な集落跡や水田遺構が発見されたが、一方で古代の護岸工事の実態を知ることができる長大な堤防や、方形の区画溝に囲まれ内部に掘立柱建物群が配置された官衙跡など、特筆すべき発見も相次いだ。

古代の出土遺物としては、野上田調査区で出土した墨書土器「倉」「上厨」「吉」など、すぐ北側の丸田調査区で出土した岡山県内では最大の陶馬や、銅製の帯金具がある。また、高田調査区では、和同開珎五枚を納めた胞衣容器と推定される土師器が出土している。

一方、足守川西岸の高塚遺跡では、完全な流水文銅鐸が埋納土坑から出土し、津寺遺跡の東に広がる政所遺跡では、貨泉や有鉤の銅釧が発見されるなど、津寺遺跡を中心としたこの地域がまさしく古代吉備の中枢部であることを如実に示す発掘成果が得られている。

今回発見された木簡は絵馬に転用された折敷片で、中屋調査区の井戸五から出土した。井戸五はほぼ円形を呈する井戸で、東西方向の建物二棟、南北方向の建物一棟の他、同時に存在したとみられる



井戸5実測図

浅い土坑群数基とともに、微高地上で検出された。井側は大小の石を簡略に据え付けているが、ほぼ半分は抜き取られて残存しない。出土遺物には、木簡や漆塗りの椀片の他、水田雑草であるタカサブローの種子がある。タカサブローの種子は、井戸が湿潤な状態で保存されたため、下層から出土したものであるが、前述の遺構群の周辺低位部に水田が存在したことを示すとみられ、これらの遺構群が農村の一面に存在した民家とその付属施設であったことを示唆しているともいえる。

明確な時期を示す土器類の出土はみられないが、周囲の遺構の検出状況や遺構の埋積土などの所見から、中世後期の一六世紀代に存

在した村落と考えられる。なお、建物の建て替えはみられず、継続的に存在した村落であった可能性は低いとみられるが、これは当時の足守川が不安定な流路をとっていたことも関係があり、常に洪水の危険性にさらされていた場所であった可能性もある。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「きんせいのでらたうへり

「たのめカ」

「とカ」

「カ」

「カ」

中の刻字「カ」

211×(92)×2 061

折敷を絵馬に転用したもので、表面には躍動する裸馬二頭が写実的に描かれている。文字は表裏にそれぞれ三行にわたって記されているが、表裏で天地が逆になっている。

表の一行めの「きんせい」が「欣盛」であるとすれば、「きんせい」は隆盛をきわめる寺院を示すことになる。続く「たうへり」は「塔辺」と推察することもできる。このように解釈すると、隆盛をきわめる寺院に何かを祈願したことが書かれているとみることができ。裏面の内容は判然としない。

なお、木簡の釈文・解釈は、比治山大学短期大学の志田原重人

氏のご教示によるものである。

9 関係文献

岡山県教育委員会『津寺遺跡四―山陽自動車道建設に伴う発掘調査一四』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告二一六 一九九七年）

（岡田 博）

